

中古文学会 2021 年度秋季大会 開催案内

【重要】 会員のみなさまへ

2021年度中古文学会秋季大会の開催形態につきまして、新型コロナウイルス感染拡大状況を鑑み、常任委員会において協議した結果、下記のようにすることと致しましたので、お知らせ申し上げます。ご了承のうえ、ご参加いただきたくお願い申し上げます。

記

(1) 予定通りの日程で現地において開催することとしますが、会員のうち事前申込をされた方のみが参加できることとします（現地参加申込多数の場合は別室にて視聴していただく等のあることもあります）。

2021年10月9日（土）・10日（日） 北海道大学

(2) 懇親会は中止とします。お弁当の手配も行いません。

また、休憩室での飲料等の提供は致しませんので、各自でご用意ください。

(3) 懇親会にかわるものとして、土曜日のシンポジウムの後に、当該会場において飲食を伴わない「交流会」を企画しております。

具体的な内容につきましては、後日、事前申込の方にお知らせします。

(4) 現地参加が困難な状況を勘案し、シンポジウム・研究発表等については録画し、大会日程終了後に、事前申込の方に対して視聴できるようにします（事務局が固定カメラによって録画するため、画質・音質等の保証はできません。また、研究発表については録音のみの場合もあります）。

視聴後に質問等を行うことはできません。

(5) 現地参加、録画視聴のいずれの場合も、同封の振込票によって事前申込を行ってください。

どちらも大会参加費（資料集代）は1,000円です。

「資料集」のPDFによる配布は行いません。

(6) 事前申込の方には、現地参加、録画視聴にかかわらず、大会の前（9月下旬を予定）に「資料集」と「録画視聴の案内」を郵送しますので、現地参加の方は「資料集」を会場に持参していただき、録画視聴の方は、大会日程終了後に「録画視聴の案内」にしたがって視聴してください。

事前申込後、現地参加を録画視聴に変更することは自由にできますが、録画視聴を現地参加に変更することはできません。

(7) 今後の感染拡大状況によっては、大会の全プログラムを遠隔開催とすることもあります。

開催形態を変更する場合は、9月上旬までに学会公式サイトに掲載します。

その場合も事前申込の方のみが参加することができることとします。

遠隔開催の場合の参加方法は、事前申込の方に「資料集」とともに郵送でお知らせします。

事前申込締切後の申込は承ることができませんのでご注意ください。

そのほか、最新情報は学会公式サイトを通じてお知らせします。本件に係る事務局・会場校への個別の問い合わせは、お控えくださるようお願い申し上げます。中古文学会事務局

中古文学会公式サイト <https://chukobungakukai.org/>

大会日程・大会会場

大会日程	10月9日(土) 13:00~18:00 〈受付〉12:30開始 中古文学会賞受賞式、シンポジウム、交流会
	10月10日(日) 09:50~15:30 〈受付〉09:20開始 研究発表会(午前)、委員会、研究発表会(午後)
大会会場	北海道大学 札幌キャンパス 農学部本館4F大講堂 〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

大会参加要領

1. 大会参加費
 - ・参加費(資料集代): 現地参加、録画視聴いずれも1,000円
 - ・入金済み参加費の自己都合による返金、または他の参加者への付け替えなどには応じられません。
 - ・領収書は、振込受領証に替えることとし、別途発行することはしません。
2. 申込方法
 - ・同封の振込票による入金をもって申込を承ります。本大会では資料集等の郵送を行う都合上、下記事務局担当研究室の振替口座を使用します。必要事項をご記入のうえ、上記の額をご入金ください(ハガキによる申込は廃止されました)。
 - ・加入者名 竹内正彦研究室
 - ・口座番号 00200-2-101947
3. 申込締切 2021年9月10日(金) * 締切後の入金は固くお断りいたします。
4. 住所・所属等の変更
 - ・住所・所属等の変更は、学会公式サイト「会員ページ」をご利用ください。同封の振込票に記載されても、変更は承ることができません。
5. 学会費の納入
 - ・同封の振込票は【大会参加費専用】です。学会費は納入できません。また、大会会場での学会費納入は受け付けません。
6. 出張依頼状
 - ・氏名・職名・提出先(所属長名)を明記のうえ、ポータルデスクへメールでお申し込みください。
7. 会場について
 - ・キャンパス内は禁煙です。
 - ・駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。
8. 宿泊について
 - ・各自で早めにご予約ください。
9. 交流広場(フリースペース)
 - ・以下の要領で交流広場を開設します。研究者相互の交流・情報交換の場としてご活用ください。
 - 用途: 博士論文要旨・論文抜刷・研究プロジェクト報告書等の展示や配布、研究会・学会等の紹介、会誌等の展示や配布・販売など。
 - 資格: 本学会員に限る。団体の場合は、本学会員が代表者であること。
 - 申込: 氏名(団体の場合は団体名および代表者名)・連絡先の住所・電話番号・メールアドレス・展示物等の内容について、9月10日(金)までに大会準備室へメールでお申し込みください。

注意：スペースに限りがあるため、申込先着順で受け付けます。

会場には、机と椅子を用意します。それ以外の対応はしません。

当日は、受付で利用手続きをしてください。

交流広場は大会開催中開場します。利用時間は任意です。出品物の持ち込みは各自で行い、終了後はすべて持ち帰ってください。

10. 臨時託児室 ・本大会では臨時託児室は開設しません。

11. 問い合わせ先 ・大会全般に関すること

中古文学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學若木タワー1012（竹内正彦）研究室内

E-mail：info@chukobungakukai.org

・参加申込、参加費納入、出張依頼状に関すること

中古文学会ポータルデスク

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-44-11 株式会社新典社内

E-mail：info@chukobungakukai.org

・会場、交流広場に関すること

中古文学会 2020 年度春季大会準備室

〒060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 7 丁目

北海道大学 文学部 後藤康文研究室内

E-mail：yasusan@let.hokudai.ac.jp

*問い合わせにはできるかぎりメールをご利用ください。

大会プログラム

第1日 10月9日(土)

12:30	受付開始
13:00-13:10	開会の辞 北海道大学文学部長・文学研究院長 藤田 健
13:10-13:25	第14回中古文学会賞授賞式
13:30-17:00	シンポジウム「堤中納言物語研究の現在」 趣意説明 北海道大学 後藤 康文 基調報告1「『堤中納言物語』における本文復元の再検討」 九州大学 岡田 貴憲 基調報告2「『堤中納言物語』「ほどほどの懸想」の企て」 大阪大谷大学〔非〕・甲南大学〔非〕 井上 新子 基調報告3「『堤中納言物語』の再評価―《娯楽+教育》の物語として―」 東北大学 横溝 博 ……休憩(15:00-15:30)…… パネリスト討議 〈司会〉北海道大学 後藤 康文 フロアとの質疑応答
17:10-18:00	交流会

第2日 10月10日(日)

09:20	受付開始
09:50-11:10	研究発表会(午前) 平安朝における初唐文学受容のあり方をめぐって―「河漢」と「詩境」― 東京大学〔院〕 具 惠珠 『枕草子』古注釈の漢文受容考 日本女子大学〔非〕 張 培華 ……休憩(11:10-13:00)・委員会(11:20-12:00)……
13:00-15:20	研究発表会(午後) 『源氏物語』浮舟巻の浮舟の手習歌「里の名を……」について 東京女子大学〔院〕 鹿子島 愛 中世王朝物語と「きよら／きよげ」―『源氏物語』享受の観点から― 帝京中学校高等学校〔非〕 深田 弥生 ……休憩(14:20-14:40)…… 祐子内親王家紀伊の琵琶の才ならびに歌の家意識 高知大学 大塚 誠也
15:20-15:30	閉会の辞 中古文学会代表委員 竹内 正彦

メイン会場：農学部本館4F大講堂

休憩室：農学部総合研究棟1F多目的室

交流広場：農学部本館5F中講堂

書籍販売：農学部本館5F中講堂

委員会：農学部総合研究棟1F多目的室

シンポジウム「堤中納言物語研究の現在」 10月9日(土)

趣意説明

北海道大学 後藤 康文

基調報告1 「『堤中納言物語』における本文復元の再検討」

九州大学 岡田 貴憲

基調報告2 「『堤中納言物語』「ほどほどの懸想」の企て」

大阪大谷大学〔非〕・甲南大学〔非〕 井上 新子

基調報告3 「『堤中納言物語』の再評価―《娯楽+教育》の物語として―」

東北大学 横溝 博

討議

〈司会〉北海道大学 後藤 康文

〔趣意〕

平安時代後期から末期にかけて数多く書かれたエンターテインメントとしての短編物語は、そのほとんどが今日に伝えられることなく散逸隠滅する運命をたどった。そうした状況に鑑みるならば、当時の「短編」十作を収めた『堤中納言物語』の存在は、それらの実態を知ることのできる貴重な遺産として計り知れない価値を有していると言えよう。

また、この作品は、作家による現代語訳、漫画やアニメーションなどを通じて、『虫めづる姫君』を筆頭に、今日一般に広く享受され親しまれている点でも特筆に値するだろう。すなわち、『源氏物語』より後の物語としては、『とりかへばや』に並ぶ人気作として、揺るぎない地位を占めるに至っているのである。

さて、そのような『堤中納言物語』の本格的な研究の歴史は、昭和最初期に始まって未だ百年に満たないとはいえ、土岐武治氏（『堤中納言物語 校本及び総索引』一九七〇）や鈴木一雄氏（『堤中納言物語序説』一九八〇）らの手によって土台が整備され、注釈書も異例といえるほど多数編まれてきた。

そうした素地の上に、井上新子著『堤中納言物語の言語空間』（二〇一六）、横溝博・久下裕利編『堤中納言物語の新世界』（二〇一七）、後藤康文著『堤中納言物語の真相』（二〇一七）といった著作の相次ぐ出版とも相俟って、近年の研究状況は、校訂本文の検証、各編の作品探究、短編性の追究、生成と享受の場の解明、語りの構造、引用の問題等々多様な角度から、にわかに活発化してきている。

本シンポジウムは、右の事柄を念頭に置きつつ、前半で各登壇者にそれぞれの関心の赴くままに基調報告を行っていただき、後半でそれらを踏まえた建設的な議論の沸騰を目論むものである。一人でも多くの方に『堤中納言物語』に関心を持っていただき、今後の研究に新たな局面をもたらす機縁ともなれば幸いである。

[文責：後藤 康文]

【基調報告】

①『堤中納言物語』における本文復元の再検討

岡田 貴憲

〔概要〕信頼に足る古写本を欠く『堤中納言物語』の注釈に際して、本文復元の重要性は他の物語を凌駕する。しかし、現在までの復元成果に対する再検証は必ずしも充分とは言えず、注釈上の影響も限定的である。本報告では、特に推測批判による復元の事例を取り上げ、その妥当性を検討し、注釈への反映に向けた見通しを示す。

②『堤中納言物語』 「ほどほどの懸想」の企て

井上 新子

〔概要〕 「ほどほどの懸想」に形象された「童」の特異性については、この物語の大きな特色として既に先学により注目され、論じられている。とりわけ『枕草子』等の表現を取り込みながら形成された冒頭部分は、新鮮な魅力を放つ。当該場面を、和歌の伝統や王朝の習俗等をも参照しつつ捉え返すと、物語のさらなる企てを見出すことができるのではないか。末尾の一文の解釈の問題等にも言及しつつ、当該物語をめぐる読みの一可能性を提示し、この物語の特質に迫りたい。

③『堤中納言物語』の再評価―《娯楽+教育》の物語として―

横溝 博

〔概要〕 『堤中納言物語』各編の魅力は、何より貴族社会の教養に裏打ちされた〈遊び心〉の横溢にあらう。その絢爛たることばの世界は、読者を物語空間へと誘い、様々な翻案作品を派生させてきた。本報告では、『堤中納言物語』各編を影響と享受の面から測定し直すことで、『堤中納言物語』の「エデュテインメント《教育+娯楽》」としての側面を捉え、再評価しようと試みる。

平安朝における初唐文学受容のあり方をめぐって—「河漢」と「詩境」—

東京大学〔院〕 具 惠珠

初唐を代表する文人である王勃・駱賓王の詩文が、奈良朝の詩壇・歌壇に影響を及ぼしたことは、小島憲之『上代日本文学と中国文学』上～下（塙書房、1962～1965）に詳論されているが、降って平安朝における王勃・駱賓王の詩文の受容については従来ほとんど注目されてこなかった。本発表では、先行研究で平安朝漢文学固有の慣用表現として捉えられてきたものが、実は王勃・駱賓王の詩文を淵源とすることを論証する。

一、菅原道真「未旦求衣賦」序の「其の興を風雲にすべからず、其の詞を河漢にすべからず」に見える名詞（「風雲」「河漢」）の動詞化について。この用法は岡村繁氏（1991）により和習と判定されたが、王勃の詩序に先例があることを検討する。

二、詩宴・詩作を仮想空間になぞらえる語彙について。「詩境」をはじめ、「文峯」「詞海」といった類語が平安朝の漢詩文に常套的に使われたことが知られているが、その多くの例は王勃・駱賓王ら初唐文人の詩文に頻出するものである。それらの語彙が初唐文学に特徴的かつ集中的に現われたのが、いかなる文学史的経緯によるのかを見据えながら、平安朝における用例を読み直す。

以上、六朝文学と一括され、平安朝漢文学との影響関係の委細が見出されてこなかった初唐文学の表現史的意義を見定め、平安朝の詩文創作の基盤をより鮮明に跡づけたい。

『枕草子』古注釈の漢文受容考

日本女子大学〔非〕 張 培華

近世以前の『枕草子』の古注釈は少ない。本発表の主な対象は近世に成立した加藤盤斎の『清少納言枕双紙抄』（延宝二年〈一六七四〉五月）十五卷、北村季吟の『春曙抄』（延宝二年〈一六七四〉七月）十二卷、岡西惟中の『枕草紙旁註』（天和元年〈一六八一〉）十一卷である。これらの古注釈書は『枕草子』を研究するためにこの上もなく貴重な文献である。特にこれらの古注釈の中では多くの古代中国と日本の漢字、漢語及び漢文に関わる典拠が指摘されてきたのである。しかし、それらの漢文受容の研究はいまだに見えない。明治、大正、昭和、平成まで様々な『枕草子』注釈書があるものの、古注釈における漢文受容の指摘を踏まえているとは必ずしも言えない。例えば、池田亀鑑は北村季吟の『春曙抄』（岩波書店）本文を段落に分けた優れた業績と言えるが、季吟の指摘した『白氏文集』の詩句を、自らの『全講枕草子』（至文堂）には取っていない。学識溢れた田中重太郎『枕冊子全注釈』（角川書店）と萩谷朴『枕草子解環』（同朋舎）にも、盤斎と季吟及び惟中の多くの指摘は見えない。古注釈における漢文受容の指摘は如何に認識すればよいのか。本発表は事例を取り上げたうえ、古注釈の漢文受容の意義を新たに考察してみたい。

『源氏物語』浮舟巻の浮舟の手習歌「里の名を……」について

東京女子大学〔院〕 鹿子島 愛

浮舟巻の浮舟の手習歌「里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住みうき」の意義について考察する。当該歌は手習巻の浮舟の手習歌に先行する性質を持ち、浮舟と薫の関係を照らし出す歌と考える。

当該歌は匂宮と薫から相次いで歌を贈られ、それぞれ浮舟が返歌する贈答歌の中心に位置する。この5首に関する先行研究は多いが、ここでは二人への返歌が特に注目され、匂宮への返歌に薫の贈歌の語が混入することや、二つの返歌の温度差、匂宮への返歌に読み取れる不吉な結末の予示などが考究されてきた。だが、一連の歌群の用語を仔細に検討してみると、中心の手習歌が成立してはじめて、以降の匂宮と薫への返歌が可能になる側面があり、この手習歌が構造的に極めて重要な位置にあることがわかる。

加えて当該歌は、男女のむつび合いではなく、浮舟が一人「手習に」歌を書いた最初のものであり、手習巻を構成する手習歌という営為を読み解く上でも注目すべきだろう。前後の贈答歌と相まって、心の交流と断絶、匂宮と薫の双方との関わりをなかに描かれる浮舟の自意識が手習巻に先行して、手習歌として描かれる意味は存外大きいのではなかろうか。

以上のような見通しに立ち、手習歌「里の名を……」について、前後の贈答歌との照応関係を検討することを起点に、「伝達しえないものとして書かれた手習歌」という当該歌の様相が浮舟の物語にとって持つ意義を考察する。

中世王朝物語と「きよら／きよげ」—『源氏物語』享受の観点から—

帝京中学校高等学校〔非〕 深田 弥生

中世王朝物語において、「中古語をいかに扱うか」は、物語制作にあたっての課題の一つだったのでないだろうか。中古物語の文章を剽窃と言ってよいレベルで取り入れる作品がある一方で、中古語を各作品なりに咀嚼し、ある一定の法則をもって用いていると思しい事例も見て取ることができる。本発表では、中古物語で美の形容語として盛んに用いられた形容動詞「きよらなり」および「きよげなり」（以下「きよら」「きよげ」）について、中世王朝物語における使い分けを分析・分類する。

両語は、『源氏物語』における分析が中心になされ、「きよら＝一流／きよげ＝二流」という峻別があるという見解は現在広く行き渡っている。しかし、本作品以外の中古物語を見渡すと、両語に一流／二流の階層があるとは必ずしも考えられない。いずれの作品にも作者自筆本が現存しない以上、作品成立の時点でどうであったかを知り得ないが、『源氏物語』の青表紙本や河内本において両語を区別して扱っていると読める点からは、少なくとも鎌倉時代初期頃には既に「きよら」が「きよげ」に優越する美だという解釈があったと考え得るだろう。

分析にあたっては、人物の卓越性や身分、性差、作品内での立ち位置に着目し、美の形容に際しての「きよら／きよげ」の持つ役割を析出するよう努める。本分析を通し、物語制作と『源氏物語』書写との間に連関を見出し、『源氏物語』享受の一端を見ることを目指す。

祐子内親王家紀伊は、摂関期末から院政期前半にかけて活動した女房歌人である。紀伊は『堀河百首』へ詠進したり、後世『小倉百人一首』に選ばれるなどしているが、その活動ぶりに比して先行研究は少ない。

紀伊には、いまだ指摘のない重要な側面が複数存在する。本発表は、紀伊の琵琶奏者としての才と、母小弁に連なる歌人としての意識を論じる。いずれも院政期における管絃の活性化や、歌の「家の風」重視といった時代的な問題を視野に入れる。

『紀伊集』には、紀伊が琵琶を演奏する記録が二つある。女性が琵琶を演奏することは珍しかった上に、自分自身が楽器を演奏したと記録する行為も珍しい。この二場面の考察に加えて、家集中に交流が記録される「七条宮の四条殿」なる人物も、実は琵琶の名手であったことを指摘する。琵琶をめぐる紀伊の自負心と時代的な風潮を論じる。

また紀伊の母小弁は『後拾遺集』に多数入集したほか、『天喜三年物語歌合』では関白藤原頼通に一目置かれていた。実は紀伊も、『紀伊集』の記録で頼通に執心されていたことがわかる。『二条太皇太后宮大弐集』に見える「たちつぐ波」という特異な表現も、小弁・紀伊の歌人母娘を尊重したものである。こうした諸資料から、歌の「家の風」をめぐる紀伊の自負心と周囲からの評価を論じる。

琵琶の才と歌の家意識と、両面から浮かび上がる紀伊の人物像を考察する。

交通アクセス



○JRをご利用の場合

JR「札幌駅」下車、徒歩 12分

○地下鉄をご利用の場合

市営交通・地下鉄南北線

「さっぽろ駅」下車、徒歩 13分

「北12条駅」下車、徒歩 11分

※当施設には駐車場がございません。

最寄りの公共交通機関のご利用をお願いいたします。

北海道大学農学部構内図

